

ヒトの歯のApexogenesisおよびApexification における病理組織学的検索

○瀬尾令士 花島俊作* 本川渉*
 諸岡基** 岡村和彦** 谷口邦久**
 瀬尾歯科クリニック 福歯大小児歯科*
 福歯大口腔病理**

根未完成な幼若永久歯の歯髄処置法として、ApexogenesisおよびApexification法が多用されている。しかしこれら両処置法施術後の、特に根尖部歯髄組織および周囲組織の経日的組織変化について動物実験的報告はあるものの、人の歯における報告は稀である。

今回、17歳1ヶ月の女子の上顎左側側切歯にApexificationを施し、1年8ヶ月後に抜歯に至った症例と、16歳8ヶ月の女子の下顎右側第2小臼歯に根管低位歯髄切断法(Apexogenesis)を施し、2年6ヶ月後、抜歯に至った症例において、経日的X線観察を行うと共に、抜去歯の歯根の、特に根尖部を中心とした組織学的変化について病理組織学的検索を行ったのでその概要を報告する。

九州大学小児歯科外来における生活断髄乳歯 の経過観察

○藤崎みずほ、松本敏秀、裏 宗玄
 森永珠紀、中田 稔
 九大・歯・小児歯

小児歯科領域でよく用いられるFC断髄法にはいくつかの問題点が指摘され、水酸化カルシウムおよびその製剤による生活断髄法を推奨する考え方が多い。しかし、その反面後者では、内部吸収の発現などの臨床的不良例が存在することも報告されている。

そこで、九州大学歯学部附属病院小児歯科外来において、1988年1月から1992年12月までの5年間に、水酸化カルシウム製剤(カルピタル)による生活断髄処置を行った乳歯に対し、その経過を観察し検討を加えた。なお資料は全身的に健康な患児で、定期診査時のデンタルX線写真が1枚以上存在し、かつ読影可能である症例から得た。

対象となったのは、男児83名、女児60名、計143名の患児から得られた252歯であり、歯種別症例数は、上下顎前歯85歯、上顎第1乳臼歯46歯、上顎第2乳臼歯25歯、下顎第1乳臼歯54歯、および下顎第2乳臼歯42歯であった。観察期間は、断髄処置後1ヵ月から55ヵ月までであった。

経過観察時の成績の判定は、自発痛やアブセス形成などの臨床症状のあるもの、あるいはデンタルX線写真により、歯根の内部吸収像や歯根膜の拡大、歯根の外部吸収像、歯槽骨の吸収などの所見が認められたものを予後不良症例とした。

断髄後経過観察により、予後不良と判定されたものは、前歯部では13歯(15.2%)、上顎臼歯部では18歯(25.4%)、下顎臼歯部では40歯(41.7%)であった。また、内部吸収像は、不良例のうち29歯(40.8%)にみられた。